

要 旨

筒井康隆『夢の木坂分岐点』論

——精神空間「座敷」の出現と演じられる「家族場面」——

太田 帆南

本論文では、現存作家である筒井康隆の「夢の木坂分岐点」という小説作品について、既存の評価とは異なる視点から作品分析を行った。「夢の木坂分岐点」は、すべての文脈に象徴的な要素が含意されていることや、主人公の設定に特殊性があるという点から作品の解釈が難解だと言われている。そのためか、研究論文等は極めて少ないという現状がある。

さらに「夢の木坂分岐点」は、第二十三回谷崎潤一郎受賞作品であるが、当時の選考委員は作品の方法論や文体に対して「高く評価する」「見事な」などと評価しており、受賞当時はその方面で好評を得た作品であったことがわかる。そこで本論文では、その先行論も踏まえつつ、「夢の木坂分岐点」に描かれる「空間」について特に注目し、論じた。

主人公の特殊な設定とは、主人公が睡眠行為をする毎、または物語の進行の途中で姓名が流転するため、主人公を一人にさだめることができないというものである。そのため作品自体に異様さが拡がり、読者の読書行為を妨げる設定であると批判を受けることもあった。そこで、この設定は作品の主題にどのような影響を与えているのか主人公の「意識」に着目して考察を行った。さらにその軸となる「意識」が姓名の流転を驚くことなくすぐに受け入れているという様子から、本作品の主人公はいくつもの人生を演じ続ける「演者」であるという意味が込められているのではないかと考えた。主人公は、自身が行き来する「家庭」と「会社」という二元的な空間の中で、自身の立場を俯瞰している。それはまるで演劇の舞台空間のようなのである。

また、会社ではドタバタ喜劇が描かれ、その様子は主人公の意思を汲んだ都合の良い展開のように読めるが、家庭では主人公の思い通りにはいかないもどかしい様子が描かれているようだ。

そして家庭に関連して、作品内に比較的多く登場する「座敷」という襖で区切られた日本家屋の一室に着目した。「座敷」は特に主人公の夢の場面に頻出することや、筒井の他の短編「遠い座敷」に描かれるような「お座敷宇宙」に対して恐怖するという状態は日本人的意識を表すイメージであると筒井自身も語っているという点から、主人公の精神状態を表現する「精神空間」であるとした。そこは他人の「家族場面」を眺める空間であったり、主人公が「おれの癩癪玉」であると言う化け物が居るなどさまざまな空間として描かれているのである。